

革命の英雄たちを祭るのは、革命的情熱の源泉であり、生きている者たちの義務と責任であり、人間としての生きざまである！

日本共産党（行動派）中央委員会
書記長 森 久

ご列席の同志諸君！ 友人の皆さん！ そして活動家と幹部の皆さん！ 本日の『二〇一三年度革命英雄記念祭』に、遠路たくさんの方々駆け付けてくださり、心から感謝し、お礼を申し上げます。

皆さんの前に、気高くもそびえ立っているこの革命英雄記念碑は、日本革命運動の歴史の証言であり、革命的伝統のシンボルであり、生命を共にする革命集団の誓いの旗印であります。

二〇一三年度、今年の革命英雄記念祭は世界を見ればお分かりのとおり、歴史の大転換というすばらしい歴史時代の中で開催されています。

歴史はすべての分野で歴史科学のもと、一步一步確実に、前へ前へと前進しています。現代世界は、資本主義は行き詰まり、民族は独立し、国家は自立し、大衆は自覚し、こうして歴史はコミュニティーへと転換する科学的歴史観の証言であります。歴史は科学法則に基づいて動き、転換しています。

日本を代表する二人の知識人、浜矩子さん、中谷巖さんの両教授は最近相次いで注目すべき本を出版しました。その中で未来はコミュニティー共同体以外にないと強調しています。これは歴史がわれわれに届けた贈り物であります。

浜矩子(はまのりこ) (同志社大学大学院教授)

著名な経済学者で多くの著作を発表。二〇一一年十一月には高橋乗宣筑波大学理事長との共著で『二〇一二年資本主義経済大清算の年になる』（東洋経済新報社刊）を発表。独占的金融資本主義はやがて崩壊せざるを得ないと予告しました。

そして予告通り、二〇一二年は現実に、アメリカのリーマンショックと金融危機、EUの財政危機を通じて資本主義は崩壊へ進むことが明確になった。こうして二〇一二年十二月、その決算書ともなる著作『新・国富論』（文春新書）を刊行し、この著作を通じて浜教授は次のことを明白にしました。

- ① アダム・スミスの『国富論』はもう古くなって現代の金融独占資本主義には通用しない。
- ② 金融独占(金利を求めて経済を支配する現代資本主義)に未来はない。登り詰めた現代金融資本主義は老いてしまい、次の時代に席を譲るしかない。
- ③ 現代のようなグローバル(経済と政治と人間社会もすべてが国際的になった時代)世界は「国民国家」(国民のための国家・国民があつて国家がある)を消滅させた。その先にあるのは地域を基礎にした人間性豊かな「共同体」しかない。ここに未来展望がある。

中谷(なかたに) 巖(いわお) (一橋大学名誉教授)

日本の代表的政治経済学者で、一九九十年代、小渕内閣の諮問機関「経済戦略会議」の議長代理（議長は総理大臣）として日本経済のかじ取り役を務めました。その後アメリカの金融危機からEUの財政危機へ、そして世界的な失業と格差社会の出現を見て、現代資本主義の根本矛盾に目を向け、二〇〇〇年代初頭、グローバル資本主義と決別して『悔い改めの書』として世間に大きな反響をあたえた『資本主義はな

ぜ自壊したのか』(集英社刊)を出版。そしてついに自ら到達した政治経済学の未来について論断した書『資本主義以後を生きるための教養書』(二〇一三年二月十日、集英社刊)を出版し、ここで中谷教授は次のことを主張しています。

- ① 資本主義は自己破壊していくと説いたマルクスの『資本論』の主張は正しかった。
 - ② 現代資本主義、金融グローバリズムが生み出した「衆愚政治・ポピュリズム」は民主主義そのものを機能不全に陥れてしまった。
 - ③ 日本の進むべき道は古き良き伝統としての、人々の人間的つながりにもとづく、地域共同体(部落共同体・村の寄り合い)を基礎にした社会と国家以外にない。
- 以上でした。

浜教授と中谷教授がここで共通して論じていることは、わが党が一貫して提起している歴史科学の法則について日本を代表する二人の知識人が同じ事を違った言葉で展開していることにわれわれは注目するのであります。歴史科学は必然の法則に基づいて、真理のもとに結集していくのだということを知らねばなりません。

二〇一二年度の特徴は「資本主義の崩壊」が現実のものとして論壇に登場しました。そして今年二〇一三年度はコミュニティー共同体社会(社会主義)が地域社会から実現されていく時代へと歴史は発展して行っています。歴史は必ず到達すべきところに到達します。

同志諸君、幹部と活動家の皆さん！

こういう新しい時代と、歴史時代の中で、今年の革命英雄記念祭が開かれています。私は、改めて、わが行動派党の科学的歴史観の正しさ、人民戦線の科学的な展望に、限りない確信と信頼を呼びかけます。

「三・一五」、「四・一六」を記念して、毎年一回革命英雄記念祭を挙げる意義について！

さて皆さん、わが党は中央の決定として、毎年四月に革命英雄記念祭を挙げています。それはつまり、わが党の歴史上、敵ブルジョア権力が日本共産党に加えた最大の弾圧たる「三・一五」と「四・一六」の両事件を記念しつつ、この凶暴な弾圧にもかかわらず、わが党は不滅であり、歴史が前進し、民主主義と社会主義は必然であるという確信を内外に宣言するため、そして党の革命的伝統をたたえ、革命の英雄たちをたたえ、いっそう団結して革命運動を推しすすめるため、偉大な革命の党を建設せんがため、このために、毎年四月に記念祭を開催しているのであります。

「三・一五」とは何か。一九二八年(昭和三年)の三月十五日、日本政府は全国の検事局を総動員して日本共産党に襲いかかったのであります。この日全国的に共産党員の家、共産党の事務所、また共産党の支持・協力者の家が急襲され、合計千六百人余の人びとが逮捕・投獄されました。それは歴史上最大の弾圧であり、最大の逮捕者でした。

翌年の一九二九年(昭和四年)四月十六日に、再び日本政府は検事局を動員、日本共産党に襲いかかり、八百二十五名の大量の共産党員を投獄・起訴したのであります。

この二つの大弾圧によって、日本共産党はその指導部を全部失ってしまい、指導部は獄中にあり、一九四五年に日本帝国主義が第二次世界大戦に敗れ、徳田球一が十八年の獄中から出獄して党を再組織するまで、個々の党員は指導部なしにバラバラの闘争をしなければならなかったという、そのような大弾圧だったのであります。

「三・一五」と「四・一六」の本質と教訓の最大のものこそ、マルクス・レーニン主義は不滅であり、日本共産党は不滅であり、革命運動と階級闘争は不敗であり、民主主義と社会主義の勝利は歴史の必然で

ある、ということであります。

日本共産党は、獄中十八年の苦闘を通じて鍛えられ、一九四五年には再び、再組織された日本共産党として人民闘争の先頭に立つに至りました。

日本共産党は徳田球一の死後、宮本修正主義によって党中央が毒されてしまいましたが、やがて党は行動派の党として一九八〇年七月十五日に再建されました。わが党は弾圧という外からの攻撃にも負けず、また修正主義の支配という中からの攻撃にも負けず、ここに立派に生き続けています。

労働者階級と階級闘争、そして共産党は、弾圧によってつぶれはしない。逆に弾圧によって党は鍛えられ、訓練され、訓練の中からたくましく成長、前進、発展するのであります。

同志諸君！

生あるものはいつかは死す。だが、人類社会とこの宇宙は無限に発展していく。人類社会は過去から現代へと同じように、未来に向かって前進する。未来は共産主義のものであり、この道への前進は闘争が切り開いていく。われわれは永遠に生き抜くことができる偉大で光栄ある生涯としてのこの道を進もう。こうしてのみ、徳田球一、渡辺政之輔、市川正一と共に、われわれもまた永遠に不滅である。

”われわれは何者か”をもう一度革命英雄記念碑の前で確認しよう！

わが党は一般的（基本的）には正統マルクス主義の党であり、特殊的に（日本において）は大武思想の党であります。それは国際マルクス主義運動の歴史、日本共産主義運動の歴史、そして現代の歴史時代がこのことを決定づけました。

国際的には、フルシチョフが出現して「スターリン批判」を展開したその瞬間から、われわれは一貫して、これはマルクス主義の哲学原理に違反しており、そしてこれは早くからレーニンが警告していたとおり、まさにフルシチョフは修正主義的裏切り者であると断定、以後一貫してこれと闘ってきました。

国内的には、日本共産党に宮本修正主義が出現、党の創立者徳田球一を否定したその瞬間から、ここに日本における修正主義があると断定、以後一貫してこれと闘ってきました。そして徳田球一が創建した「獄中十八年・非転向」という日本共産党の不屈の革命精神と革命的伝統を守り抜きました。それは日本共産党（行動派）歴史年表を見ればわかるとおりであります。

中国における文化大革命が日本共産主義運動に刺激をあたえ、日本国内に「文革左派」が発生したとき、中国共産党のあるチームからわれわれに一定の要求（左派連合）があったとき、われわれはマルクス主義の理論上の原則にもとづきこれを拒否しました。その後の歴史はわれわれが正しかったことを証明したのであります。

そして今日、イラク戦争が発生したとき、この帝国主義戦争はアメリカ帝国主義を崩壊へ導くだろうと予告しました。こう主張したのはわれわれだけでしたが、現代の歴史がその正しさを完全に証明しています。

われわれは常に、一貫して、正統マルクス主義とその理論上（思想上）の原理、理念、原則を守り通し、それを止揚しつつきました。マルクス主義の歴史と現代史がわれわれの正しさを立証しています。そしてこれらの闘いと運動においては常に大武礼一郎議長を中心に全党が統一し、団結し、結束しました。ここにわれわれの誇り、われわれの確信と信念があり、そしてこのような歴史が、科学的証明として「わが党は正統マルクス主義の党であり、大武思想の党である」ことを決定づけたのであります。

革命英雄記念碑の碑誌にささげるわれわれの誓い！

同志の皆さん！ 友人の皆さん！ 私は本日ご列席の皆さんと、そして皆さんを通じてすべての革命家と労働者階級、人民と共に、この革命英雄記念碑に誓いを立てたいと思います。

皆さん、この革命英雄記念碑を仰ぎ見る度にぜひ『碑誌』を繰り返し、お読みいただきたい。そしてその度に、三賢人や、入魂者の姿を思い出していただきたい。大武礼一郎議長による碑誌は次のように言っています。

『日本共産党の創立者・徳田球一、そして日本共産党の革命的行動派として、草創期の党をみちびいた徳田球一、渡辺政之輔、市川正一の三賢人がここに眠る。』

また三賢人と共に闘った人びと、三賢人がのこした偉大な革命的伝統を復活させて再建された日本共産党（行動派）、この偉大な党と共に闘った人びと、すなわち日本革命に身を捧げた偉大な共産主義者と革命的行動派の英雄たちがここに眠る。

われわれは歴史を尊重しなければならない。革命運動は永遠の過去から永遠の未来に向かって前進し発展しつづける巨大な流れである。そして人間は歴史的条件が成熟して提起された問題だけを解決する。歴史的条件の成熟していない問題や、歴史的な制約のある問題を解決することは不可能である。そしてまた歴史的に未解決のこの問題を解決するものこそ党と革命の後継者でなければならない。

われわれはこのような偉大で光栄ある後継者がはたさなければならない任務に全力をあげ、力を合わせて実現しようではないか。歴史が与えたこの問題に対するわれわれの姿勢は感謝であり、これを実現することへの誇りであり、必ず勝利するということへの不動の確信と信念である。

先人と後人をふくめてわが革命集団は、闘う集団であり、一大家族の集団である。わが一大家族はこの革命英雄記念碑のもと、永遠に一体である。

わが旗じるし革命英雄記念碑万歳！』

最後にわが行動派党のスローガンを提起し、報告を終わります。

▼われわれは正統マルクス主義者である。そしてわれわれはその日本における唯一の党、大武思想と行動派党である！

▼われわれは哲学・科学の統一された絶対的真理を堅持した、人民と歴史の進路を導く灯台、羅針盤、道しるべである！

▼われわれは歴史の要求と、人民の要求と、運動と闘いの要求にもとづいて存在しているのであり、歴史が必然性に到達するまで存在し、運動し、闘いつづける！

▼われわれの思想信条は、マルクスが愛したあの言葉「汝の道を行け、人には語るにまかせよ」である！

▼われわれは歴史の中から生まれ、歴史と共に存在し、歴史と共に永遠に不滅である！

(以上)